

2002年1月15日(火)

東奥日報

ニュース

■ 東北町で新システムの野菜生産

東北町のビニールハウスで土の中に埋め込んだ特殊パイプを使い、土中加温した小松菜とホウレン草が収穫適期を迎えている。温風ボイラーを使い、ハウス全体を温める従来の方式に比べ格段に安上がりで、品質、収穫量とも優れているため、新しい冬季農業のシステムとして注目されそうだ。



東北町外姥沢西平、農業本間安夫さんはビニールハウス十五棟を使い、通年で小松菜とホウレン草の無農薬、有機栽培に取り組んでいる。

土中加温は実験栽培で、約二百平方メートルのハウス二棟のうち一方に土中加温の配管を施した上、十一月十九日、小松菜とホウレン草の種をまいた。

土中に埋め込んだパイプは外管と内管の二重構造で、二つの管の間に特殊な作動液を充てん。内管の中をボイラーで加熱した温湯が流れる仕組み。三和鋼器(本社東京)が製造、平内町の大双産業が施工した。

土中十センチにセンサーを取り付け、温度を一五―二〇度に設定。加温したところ、順調に生育し、一月八日には小松菜の初出荷にこぎ着けた。小松菜は五十日前後、ホウレン草も六十日ほどで収穫できる見込み。

一方、保温資材をかぶせただけの無加温ハウスでは草丈が四―五センチと、まだ生育初期段階で、収穫は三月後半になるとみられている。

本間さんは「葉肉が厚く、食味に優れ、収穫量も申し分ない。今月中に再度、種まきを行うと三月上旬には適期を迎え、ひと冬に二度収穫できる」と話している。

大双産業の竹達一徳社長は「熱効率のいい特殊パイプのため燃費がよく、条件次第で燃料消費を温風ボイラーの十分の一程度に抑えられるのではないかと話している。

※写真は土中加温システムで青々と成長した小松菜(左)とホウレンソウ

[前へ](#) | [次へ](#)

[HOME](#)